

令和3年度 第2回札幌市発達障がい者支援地域協議会（全体会）

日時 令和4年2月10日（木）14時30分～17時00分

手法 オンライン開催

司会 永井会長

参加者（敬称略） 永井、いちこ、長田、清水川、杉本、林、金澤、荒川、松本、西尾、石田、小川、神田、（以下事務局）大館、坂井、斎藤

記録 障がい福祉課斎藤

内容

1 事務局からの事前説明 神田委員

定刻となりましたので令和3年度第2回札幌市発達障がい者支援地域協議会を開始いたします。事務局の札幌市障がい福祉課発達障がい担当係長の神田と申します。本日は皆さま大変お忙しい中、また、新型コロナウイルス感染症拡大によるご対応で大変な中、ご参加いただきありがとうございます。

H17年度から設置されていた関係機関連絡会議をこの協議会に移行し、今年度は2年目ですが立ち上げた時期からずっとコロナ禍で、制限が多くありました。そんな中ではありますが、様々な取組にご協力いただいており、改めて感謝申し上げます。

・委員出席状況

教育委員会学校教育部学びの支援担当課北原特別支援教育推進担当係長、子ども未来局子育て支援部子育て支援課星野指導担当係長が欠席のため、書面でご意見をいただいております。

協議会事務局は札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがる、ちくたく、障がい福祉課が担っております。名簿にお名前はありませんが、事務局かつ理解促進部会部会長としておがるの大館さん、そしておがるの坂井さん、障がい福祉課から就労・相談支援担当係斎藤さんに参加いただいたしております。

・資料について

資料についての確認です。皆さんに資料は郵便でお送りしておりますが、お手元にないものについてパワーポイントを用いて説明させていただくものもあります。また、お送りしている組織図については、R2年度とR3年度で取組が変わっているところがあり、微修正しておりますのでご確認ください。

2 報告・検討事項 進行 永井会長

（1）各部会・プロジェクトチームの活動報告・次年度活動予定（14：35～）

ア 理解促進部会 大館氏

今年度、オンラインで年2回の会議を実施し、意見交換を行った。啓発事業としておがると親の会の共催研修に参画し、「自分のことの伝え方」をテーマに動画を作成し、現在は見逃し配信を実施している。成人期のチラシを作成し、札幌市のHPや国、道の情報などをまとめた。児童期のチラシと裏表にして配布したいと考えている。次年度以後の課題として本人や支援者が発達障がいについて説明しやすいツールが無いことが挙が

り、次年度おがるのツールをベースに作成予定となっている。コロナ禍の状況が続くことが予測され、新しいことに取り組むことは難しいと思うため、次年度はおがるのスタート講座（一般市民向け）にも参画してもらいたいと思っている。

イ 家族への支援部会 小川委員

今年度はオンラインで会議を開催し、初回はペアレントメンターとサポートファイルさっぽろについて、第二回はペアレントプログラム、コロナ禍における家族支援について意見交換を行った。次年度以後の課題として、ペアレントメンターの周知やサポートファイルさっぽろ活用のメリットを伝えること、家族支援の情報交換の場が必要ということが挙がった。次年度も引き続き今年度同様の機能を持ち続けたい。

ウ 発達障がい理解促進委員会～カラフルブレイン札幌～PT 神田委員

今年度、自閉症啓発デーは開催できたが、カラフルブレインアートフェスは開催できなかった。自閉症啓発デーは次年度も4月2日（土）に開催予定。カラフルブレインアートフェスについては、開催期間をこれまでの2日から1日に短縮し、11月頃に実施する予定としているが、詳しくは次年度検討する。今年度はカラフルブレインアートフェスが開催できなかつたため、他の啓発の手法として親御さん向けのインターネット情報をまとめたチラシを作成した。理解促進部会が作成したチラシと合わせて、情報提供していきたい。

このPTの位置づけについて委員に次年度以降の意向を確認したところ、協議会に位置付けず、以前の形に戻したいという意見が多く、一旦実行委員会形式に戻すことになった。コロナ禍で書面会議が多くなってしまい協議会に位置づけたメリットを感じにくかったことも一因と思われる。PTでなくなったとしても市も関係する普及啓発イベントであるため、理解促進部会の中で情報共有はしていきたい。

エ 保護者・幼児期支援者向け人材育成（ペアプロ）PT 小川委員

ペアレントプログラムの周知を目的に研修会を開催。保健センター、ちあふる、さっぽ、認定こども園の職員を対象としてYoutubeで動画を配信した。研修の申込者は239人おり、1か月で741回の視聴があった。参加者の属性は保育士、幼稚園、保健師など。アンケート結果では、「満足」や「役立つ」が9割以上で考え方やアドバイスの仕方が参考になったという声が多くあった。今後所属の機関で導入したいという前向きな意見もあったが、コロナ禍で人が集まることが難しいことやペアレントプログラムの回数の多さから導入は難しいという声が1割あった。

オ 発達障害児者地域生活支援モデル事業 PT 神田委員

モデル事業は国庫補助事業で、札幌市ではH25年度からエントリーしている。事業実施にあたっては、「モデル事業 企画・推進委員会」を設置すること、とされている。この会議体について、R2年度より協議会PTに位置づけている。

今年度のモデル事業の取組は、コーディネーターによるモデルケース支援、ラポール

形成のためのアイデア集作成、研修会の実施、企画・推進委員会でのケース検討、ファミリープログラムの実施。発達障がいを背景に持つひきこもりケースに対して、チーム支援が有効ということは昨年度の取組の中でまとめたところだが、今年はチーム支援をコーディネートする機関に入っていただき、コーディネーターの果たす役割、効果的な介入方法などを明らかにし、支援者向けに研修会の開催や成果物により、情報提供することとした。チームで関わるケース数は5事例とし、コーディネーター機関として動いてくださっていたのはさっぽろ若者サポートステーション、ひきこもり地域支援センター、相談室あさかけ、東区第1地域包括支援センター、札幌市自閉症・発達障がい支援センターおがるの5機関。分野が違う支援機関がチームで関わると視点が変えられる、支援手法が広がるというという感想が多かったが、分野が変わると文化も違い、支援の手法やスピード感もだいぶ違う、という点が個人的には印象深かった。親側の支援者は親の身体疾患や認知症などの進行で時間に猶予がないので急ぎたい、障がい者支援側は本人に選択肢を提示し、伴走型支援でゆっくり関わる、というスタンスの違いが時にある、ということを関係機関間でも共有できた。

また、コーディネーター機関の皆さんから、ラポール形成のためのアイデアをいただき、3月完成に向けてはるにれの里さんに作成していただいているところ。ファミリープログラムについても5事例に対し取り組んでいただいた。ひきこもりのご本人のことをどうしてもマイナスのイメージで見がちになってしまったり、親御さんも自分自身のために何かしようという気持ちになれなかつたりする方もいると思うが、ファミリープログラムでは、親御さんがまず元気に・ご本人のよいところをみつける・ほめる・どういう時に心配な行動が起きがちなのかといったことをワークで考えられるプログラムにして進めておられ、私たちも興味深く聞かせていただいた。

研修会について、1回目は大正大学の近藤直司先生からご講話をいただくとともに、事業の中間報告をしていただいた。2回目は1月末に実施したばかり。地域包括支援センターや相談室等の支援機関から60名の参加があった。2回目の研修会は、チーム支援の事例報告とグループワーク、近藤先生からのご助言があり、参加者の皆さんからは「専門職が対象者に関わる視点や立ち位置、多職種連携について改めて気づきや考え方を学ぶことができた」といった感想を多くいただき、好評だったと聞いている。高齢者支援分野の方には、ここ3年のモデル事業の研修会を通じて、発達障がい支援を知っていただくよい機会になったのではないか。

また、年3回の企画・推進委員会では、事業についての検討・報告を行うとともに、今年は学齢期ケースの事例検討を行った。現在進行形でその年齢の支援をしていない、例えば矯正機関などの支援機関も委員の中には入っているが、「今自分の機関が支援しているような、たくさんの課題を抱えた状態の大人にならないように、このお子さんや保護者支援として何ができるか」、「自分の機関だったらどのような関わりができるか」、「どう他機関と連携したらよいか」ということをいろんな方の視点を入れて話し合うことができ、ケース検討を通じて各機関の役割なども知ることができ、とてもよい機会となっていると思う。

モデル事業PTを通じて抽出された課題について、分野を超えての連携にあたって

は、機関間のスタンスの違い、スピード感等を双方に理解した上で役割分担を検討していく必要がある。チーム支援にコーディネーターが入る支援は有効だということは今年度の取組でも感触としてあったが、コーディネーターになりうる人材が十分ではない。また、困難事例支援については、連携があることにより支援に取り組む支援者や支援機関が増えていくこと等を期待していきたいところだが、その仕組みを作っていくには、まだまだ課題が多い。

モデル事業は単年度事業であるため、次年度の内容の詳細についてはこれから詰めていく予定。細かい部分についてもっと聞いてみたいという委員においては、実際の支援に入っておられた西尾センター長や石田マネジャーがおられるので、のちほどご質問いただけたら。

○質疑応答・意見交換

※書面でのご意見については画面上で共有

・理解促進部会について

神田委員

共通のツールを作ろうという話が出て、ゼロから作るかという話もあったが、おがるで既に作成しているものを活用できるのでは、ということでベースに作成することになった。

永井会長

紙で配ると読まれない可能性もあり、スマートフォンで閲覧できるよう工夫するとよいかかもしれない。また、紙で配布する場合にはA5サイズの方が見やすいかもしない。

大館さん

紙を渡して終わらないよう、説明の仕方や活用の仕方の例示も作成する予定。支援機関にはデータで配布する。

荒川委員

若い親に情報提供するときにはメールが多い。データだと元気さ一ちやリンク先を配布できるので助かる。紙だと郵送の手間や費用がかかる。所属する法人のセキュリティの関係で現在は対応できていないが、LINEにしてほしいというニーズもある。

いちこ委員

啓発のイラストにカラフルブレインの参加者に描画を依頼するとよいのではないか。

永井会長

研修は80名の参加だったのか？

大館さん

参加は50名程度。再生回数は各動画100回程度。おがるの公開用Youtubeに一部を掲載する。

松本委員

共通ツールは啓発のためか、本人の気づきを促すためのどちらか？たやすくしては「自分は発達障がいかかもしれない」という方に使えるものだとありがたい。

大館さん

どこをポイントとするかは悩むところ。ぜひ今後相談させていただきたい。

永井会長

具体的な情報を知りたい方と学術的情報を求めている方もいると思う。

・家族への支援部会について

いちこ委員

ペアレントプログラムについて、アンケートの中にグループワークを進める自信がないという意見があったと思う。自分自身がピアソポーターの講師養成講座を受講した際に、ファシリテーターと講師の練習をスマールステップでやってみて勉強になった。2人で役割分担するとかペアプロ実施前に練習できるようなサポートもあるとよいかもしないと思った。

永井会長

ファシリテートに自信がない人もいるのでサポートできればよいと思う。参加者で保育士が多かったことについて、機関によって回答に差が出ることはあったか？

小川委員

大きな差はなかった。機関によって実施が難しいということでもなかった。

林委員

コロナ禍で対面によるサポートファイルさっぽろの普及が難しい時の工夫があれば教えて欲しい。

神田委員

印刷環境がない方には配布もしており、この1～2年は減っていく部数が少ないが、ダウンロードしていただくのが基本なので、必ずしも減っているのかはわからない。教育委員会で個別の教育支援計画の基本様式がサポートファイルさっぽろになったので、就学すると必要なお子さんに対しては学校から渡していると思う。障がい児地域支援マネジメント事業でも随時周知してもらっている。今回作成した親御さん向けのチラシの中にもサポートファイルについて入れているが、周知は今後も必要と思う。

長田委員

今年度、コロナ禍で相談件数は減ったが、情報を知りたいという保護者は多い。ペアレンツセンター事業では幼児期の保護者にサポートファイルさっぽろを渡すようにしている。将来的な支援の情報を知りたいという方も多い。実体験ではファイルは年金や手帳申請等にも役立つた。ファイルを埋めるのが大変という方には通知表等を挟んでおくだけでもよいと伝えており、状況に合わせて柔軟に活用してもらいたいと思う。

松本委員

ナカポツでもコロナ禍になってからは働きたいという意向より情報収集したいという方が多くなった印象がある。ナカポツにはまだサポートファイルさっぽろを持参された方はいないが、教育の出口のところでも活用して欲しい。

永井会長

サポートファイルさっぽろはいつから始まったものか？

長田委員

サポートファイルさっぽろの前身の学びの手帳はH15年から開始している。

神田委員

教育委員会ではH28 年度から個別の教育支援計画の基本様式としている。

・発達障がい理解促進委員会～カラフルブレイン札幌～PTについて

永井会長

P Tから実行委員会に戻ることになったのは委員会の方が小回りが効くからということなのだろうか？

神田委員

コロナ禍で書面会議となることが多く、動きが煩雑で負担に感じられたかもしれない。

大館さん

やっていることは前と変わらないが、書面会議でやらないといけないところが明確になり、何が変わったのかも見えにくく、協議会に入ったから煩雑になったと感じられたかもしれない。

いちこ委員

啓発チラシにピアカウンセリングという言葉が入っているが、これは何を意味しているか？

大館さん

これは札幌市のホームページの文言から引用している。

荒川委員

札幌市のホームページでは事業名がピアソーター。カウンセリングにはなっていないが、他の市町村ではこういった名前で実施しているところもあり、札幌市内においてはどうかというところ。

林委員

相談室すきっぷのソーターがカウンセリングという言葉を使っていたが、ホームページの文言が実態とずれがあったと思うので調整が必要だと思う。

荒川委員

カウンセリングという言葉は面談するというイメージがつきやすい。実施要綱に来年から目的を書く予定と聞いているので、確認してはどうか。

神田委員

担当の係に確認する。

長田委員

4月2日の自閉症啓発デーイベントへの協力は継続し、カラフルブレインアートフェスも実施するのか？令和4年度から委員会に戻すという理解でよいか？その場合、従来のものにそのまま戻せないと思う。親の会も変わってきているので、体制の立て直しも必要だと思う。4月2日のイベントには育成会も参加した時期がある。親の会がどの程度活動できるのか、親の会が活動で手いっぱいということもある。JDDに参加している団体という区切りができなくなっていると思う。

神田委員

P T では 11 月にカラフルブレインアートフェスを開催する方向で検討した。令和4年度か

ら実行委員会形式に戻すことになった。自閉症啓発デーはポプラ会が主催で、隣のスペースを使わせてもらい普及啓発を行う予定。次年度の体制について、クローバーの方が代表と決まつてはいる。カラフルブレインアートフェスについては、学生の若い力を生かしたいという意見もあった。コロナ禍なので難しいかもしれないが、永井会長に学生のアイデア、当日の協力を相談することがあるかもしれない。

永井会長

感染のリスクもある中なので直接の手伝いは難しいかもしれないが、動画作成時に意見を出したりや拡散する方法について、学生はうまいと思う。具体的な希望があれば相談してほしい。

金澤委員

PTから委員会になる経緯は理解したが、実行委員会形式がどこに着地するのか？理解促進部会の中に委員会を置くのがいいと思う。

神田委員

この協議会は発達障がいに関わるものをまとめて開催してきたため、実行委員会を協議会から切り離すことはしたくなかったが、委員の意向。協議会から外れるにしても理解促進部会の動きを背景に動くことも提案できるとは思う。

永井会長

協議会との関わりについて、次年度以後は整理するということで、今回は協議会から抜けるという結論でよいか。

長田委員

PTという縛りはなくし、自由度は保ったうえで理解促進部会を背景に動くということにした方がよいと思う。この協議会の中に位置づけられると発達障がいの啓発と関連を持てるのでよいと思う。

神田委員

協議会からの意見として、PT委員にお伝えしたい。

・保護者・児童期支援者向け人材育成（ペアプロ）PTについて

意見なし

・発達障害児者地域生活支援モデル事業PTについて

永井会長

事例検討はどのように実施しているのか。

神田委員

企画・推進委員会では、今年度、児童相談所、ちくたく、教育委員会から架空事例だが提供していただき、参加者からは事例への質問をしてもらしながら、全員に一通り意見を言ってもらいう形で行った。立場が違うといろんな意見が出る。

いちこ委員

自分が子どもだったら、親の立場なら、ピアソポーターなら等、自分の立場ならこうする、ということが意見として出てくる。質問の仕方がそれぞれの機関で異なるのもおもしろい。聞

いているだけでも聞き応えがある。

金澤委員

P Tはどのように進んでいくのか。地域生活を送るうえでのニーズ、連携が必要なニーズはあるのか。市内でコーディネートはどれくらい必要かわかったうえで進めるのが大事。基礎調査やアンケートを行っているのか？

神田委員

モデル事業は年度ごとに何をするか、委員会を開催し、事業内容を検討する。いろいろな方に集まってもらう機会を利用して事例検討をしている。事例検討自体が事業の主体ではない。

国庫補助事業の枠組みで基本的に毎年違うことをするようになっている。8050 問題の 50 に発達障がいの方がいるのでは、ということで R 1 年度に地域包括支援センター職員にアンケート調査を実施している。50 ケースは支援のはざまになりがちであることがわかり、R 2 年度にはモデルケースへのチーム支援を行った。今年度はチーム支援にコーディネーターを入れた取組みという流れである。

西尾委員

2 年前にアンケートを実施し、地域包括支援センターが 50 に発達障がいのある方がいたときの対応に苦慮していることが分かった。いくつかのパターン分けをし、それぞれの機関で少しずつはみ出て支援を行うこととした。こういった取組みが少しずつつながって来ている。

金澤委員

ニーズがある中でどのように P T で取り組んでいるかが分かった。

荒川委員

自分自身も 1 月の研修会に参加した。地域支援員を受託しているので、50 への支援について地域包括支援センターからの要望があるのならば教えてほしい。少しづつそれが自分の領域からはみ出した支援をする必要があると思う。相談支援事業所はマンパワーが足りず、緊急対応に慣れていないし、人も足りない。自分の事業所では、最近包括支援センターからの依頼があってピアサポートと対応したことがあった。相談支援部会での発信の仕方を考えていきたいと思う。どれくらいのニーズがあるか、後で西尾委員と話したい。

西尾委員

発達障がいというより不登校やひきこもり、虐待、触法等が切り口になるケースが多いと思う。自分の職域のみではうまくいかず、こういった協議会を活用し、領域をまたぐ時代だと思う。一緒にケースを進められるとよい。

・その他

杉本委員

児相は 0 ~ 18 歳に対してのぎゅっと凝縮した関わりが多い。18 歳を超えたたらどうなるのかと考えていたが協議会に参加し、児相の支援の後に多くの機関が関わってくれていることがわかった。その後のつながりが見えるようになったと思う。

清水川委員

8050 の問題として切迫した課題について学ばせてもらった。普段は母子保健で乳幼児の発達に係る支援をしているので、ここで学んだことを活かし母子保健の支援を考えていきたい。

石田委員

モデル事業に関わっており、8050については大半が未診断となっている。障がい者相談支援事業所が関わらない場合もあり、相談支援事業所の支援が必要ということをぜひ伝えてほしい。本人に診断がない場合、引きこもりや障がい、困窮などが支援の切り口になる場合がある。発達障がいという切り口だけではない。どこが関わるのがいいのか。一つの機関が頑張ることではない。これらの問題は孤立ということに集約してくる。情報提供は大事だが、情報提供のみで終わらせるのはよくないと思う。OJTをしっかりとしていくこと。ひきこもり支援のコンサルテーション、スーパーバイズなど、情報にプラスアルファすることも大事にしていきたい。札幌市はいろんな情報、機関はあるがまとまりにくいところもある。

坂井さん

ペアレントプログラムなどを札幌市で使っていくことには難しさもある。形式を守ることも大事ではあるが、どう進めていくのが有効なのか、みなさんと模索していきたい。

長田委員

不登校の子どもで学校に行けないが放課後等デイサービスには行ける場合がある。フリースクールなら出席にカウントされるが放課後等デイサービスはどうなのか。情報を教えていただきたい。

荒川委員

学校長の判断で出席になっているケースが一つある。

杉本委員

情報提供だが、児童発達支援や放課後等デイサービスの申請に際し児相の判定を要する場合、発達障がいの疑い、知的な問題、注意集中の問題等の心理診断があれば該当と判断している。前述の診断が付かない不登校のお子さんが児童デイを利用できない現状であれば、出席日数にカウントされる条件は公平ではないように思う。

金澤委員

出席にするか否かは学校長の裁量と聞いており、麦の子会周辺の子どもは出席が認められている。今後、児童発達支援や放課後等デイサービスは発達支援重視と生活支援重視の2つのタイプに分かれていく見込み。人員を要するのは発達支援を重視する事業所。生活支援を伴うものも含めて文科省と整理が必要だと思う。

西尾委員

放課後等デイサービスに行けることが全面に出ると学校が置き去りになるのがよくない。学校が支援会議に出向いていくことを義務化する等しないと、不登校の児童が放課後等デイサービスに行けばよいという議論になることが懸念される。

3 次年度委員について

神田委員

次年度の委員増について提案したい。お一人は理解促進部会の部会長であるおがるの大館さん。全体会委員が決まってから、各部会を設置したので、大館さんは委員ではない状態でここ2年間会議にご参加いただいている。もうお一方。現在医療部門は、ちくたく小川係長に入っていたいているが、ちくたくは子どもを対象としている機関のため、成人期の医療分野の方にも入っていただいた方がよいのではないかという意見を、おがるの皆さん、そして小川係長

に早い段階からいただいていた。要綱上、全体会の委員は20名以内としていて、現在委員は15名なので、人數的には問題はない。西尾センター長からほっとステーション（大通メンタルクリニック）の佐々木さんにアプローチいただいていて、内諾をいただいている。佐々木さんは長くモデル事業の委員として発達の分野に関わっていただいており、委員の皆さまからの反対がなければ、次年度は2名の委員増に向けて手続きを踏みたい。

また、全体会の期限がまもなく終期を迎える、委員の皆さまの任期も満了となる。再任は妨げないとしており、広く各分野からご就任いただいているので、ぜひ引き続き委員を継続していただけたらと考えている。

永井会長

委員増賛成の方は拍手をお願いします。
⇒参加委員より承諾を得た。

委員継続できない方はいませんか？
⇒挙手なし。全委員から委員を継続することに承諾を得た。

4 閉会 神田委員

永井会長、どうもありがとうございました。ではこれで令和3年度第2回発達障がい者支援地域協議会を終了いたします。委員の皆さま、どうもありがとうございました。今後ともよろしくお願いします。